

魔王と始めるスローライフ！

猫家桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔王を倒しに苦勞して魔王城へ。

そこからさらに苦勞して魔王の間へ。

死にかけて倒して、国へ帰って、お家に帰ったら。

「ただいまー」

「おかえりー!」

「え?!」

魔王がいました。

……俺の苦勞は？

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
13	10	7	4	1

第一話

俺はラルフ。

冒険者だ。そして、ソロだ。

ボッチじゃない。……………多分。

と、友達はいるし!

実質1番上のA級冒険者だ。1番上? S級だけど? 英雄だけだよ?
?

そして21歳。

将来、英雄として……………。とか言われてるが、どうでもいい。誰かを助けられたらいいんだよ。

で、現在進行形で死にそうです。

A級モンスターに、キングオーガっていうのがあるんだけど、そいつをぶっ殺そうとしていたわけ。

モンスターにもランクがあつて、A級冒険者ならA級モンスターって感じ。

そしたら逃げられた。

追いかけて回してたら城の中に入って行ったので突入。

そしたらそこは魔王城! みたいな。

で、魔王がいたと。

魔王は、SSSランク。Sランクの英雄が10人で対等かな? 100人で倒せるって感じの、うん、ザ・ラスボス。

勝ち目はねえよ!!!

「帰ってお風呂入ってご飯食べて寝るために帰っていい?」

「ダメだよ?!? つか地味に欲張ってるね君!!」

魔王は、女?!?!?

名前からして男だろ!

……………いかんいかん、人間の価値観を押し付けては。

そつとキングオーガを殺して、

「えっ?!? 1発?!?」

討伐証明の耳を切って、

よしにつげろー！ー！ー！ー！！！！

「ええ?!?!に、逃げるなあ!!」

ヒュツ、ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ。

特級魔法【死の緋焰】《インフェルノ》が飛んできた。

こっわあ!!!

「今までのS級より強いね、きみ。キングオーガを1発つて」

「俺、A級だぞ?」

「ええ?!?!でも、本当に強い。昔来た勇者より」

「……俺をあんなクズ共と一緒にするな」

「え?あ、ごめんね?」

そう言っているが、全く隙がない。

とりあえず、突き。

「フツ!」

「おととつと」

魔王の首を掠っただけだった。

「クソツ!」

「おお。私の柔肌にキズをつけたの、きみが初めてだよ。今までのみ

んな、さっきので死んでたもん」

「柔肌か?」

「え?そうだよ?今までケアをしなかった日なんてないし。まあ、そ

れは置いといて」

置いとくのか。

「きみ、なんて名前なの?教えてよ」

「ラルフ」

「意味は?」

「狼、だ」

「ふうん。いい名前だね。あ、そうだ、私の名前って知ってる?」

「いや?」

ってか、おしゃべりだな。流石女子。

「私ね、リリースって言うんだ」

「いい名前じゃねえか」

「ふふ、ありがとう」

「知ってるか？その名前、俺らの方じゃ花の名前なんだ。花言葉は、なんだっけな？」

「覚えてないのか………」

「うーん、あ、そうそう、永遠の愛、だったかな？」

「永遠の愛かあ。うん、ありがとう。でも、お話の時間もおわりかな」

そう言うと、リリスの周りに膨大な量の魔力が集ってきた。

え、やばくね？ワンチャン倒せても集まった魔力が爆発して死ぬ。

倒せなかつたら死ぬ。

え、結局死ぬやん。

あー、帰って寝たい。

「大丈夫、ちゃんと墓は作るから！」

「心配するところが違う!!」

あー、くそ！やけくそだ！

『『召喚』』

魔剣：百夜ひやくやを握る。こいつは、俺の寿命を吸いとる代わりに、忌々しい聖剣より強い力を得ることが出来る。

「いくよ。今までっていつても短い時間だけど、楽しかったよ。バイバイ」

「どっちが死ぬか分かんねえけどな」

そういった直後、魔王城は爆散した。

第2話

「?!?」

「ここは?!?」

「魔王はどこだ?!?」

「あ、ラルフ起きた」

目の前には友人のイリアがいた。

「魔王は?!?」

「ラルフが倒してた。ほら、魔石。でも、百夜を使い過ぎ。あと50年くらいしか寿命残ってない」

「ちよつと魔王の魔石貸して?」

「?はい」

「ありがとう」

受け取った魔石を口に入れ、喰った。

「?!?」

「俺な、魔石喰ったら寿命伸びるらしいんだわ」

おお。大体感覚で5000年から6000年ってところかな。
すげえな魔王。

……………墓、作りに行こうかな。

「なんだ、ラルフもか」

「も?」

「私は他の生命体から血を吸うことで寿命を伸ばしてる。私の使う武器も『呪いの武器カース・ウエポン』だから寿命がねえ」

「俺の血、吸うか?」

「んーん。今はいい。さつき吸った」

??さつき……………?

「つてか今更だけど、ここどこ?」

「私の家」

「ほんとだ。……………なんで一緒のベッド?」

「え……………?寒かったからの決まってるじゃん」

違う、そういうことじゃないんだよ!!イリアみたいな美女と男が一

緒の布団に入ってみろ！危ないだろ！！

お父さんはそれが心配なんだよ！

「お父さんじゃないでしょ？それに、ラルフは童貞でしょ？私も処女だけど」

「うるせえしそうじゃねえよ!!!」

久し振りに家に帰ってきた気がする。2日前だけど。

「ただいまー」

誰もいないけど帰ってきたら癖で言ってしまう。

「おかえりー!?!」

家が喋った!?!

と、思ったら、ひよこつと……。

「つてなんでリリース居るんだよ!?!?」

「はわああああああ!?!?」

マジでなんで!?!

!?!

「えへへー、実はねー、ラルフがカッコ良くて一回死んでただけど、死んだままでいれるかってね、生き返ってきたのー!」

「さすが魔王！俺の苦労は水の泡だぜ!!」

「え、何言ってるの？前の四分の一くらいに弱体化してるよ?」

でも、あれの4分の1でも十分化け物だぞ!?

「それに、寿命も減ったしー。残り1000年くらいしかないんだけ

どー！魔石ちよーだーい!!」

「え、もしかして魔石喰ったら寿命延びるの?」

「そだよー?まあ、魔族だけだけどね」

「ごめんそれ俺にもできる」

「……………まっ?」

「まじ」

「それ特異体質」

「ほかに、友達には血を吸ったら寿命が伸びるのも居る」

「わあ。吸血鬼の体質だー！私吸われたことないから吸われてみたー

い」

お気楽か。

「でも、ラルフは純血だしなー」

「ん？どういうこと？」

「純血はその種族の能力しか受け継げれないはずなんだけどねえ。ラルフは純血の人間だし」

「??あーっとつまり？」

「Aランクって馬鹿なの？」

「うるせえ、追いつすぞ」

「わあああああああああ!!!ごめん、それは勘弁してー!!」

第3話

週2〜3回投稿とは。

コメント、評価くれたら更新スピードが1,09くらい上がります。

「掃除してくれてありがとな」

「っ!?!うん!」

あの、あれだ。褒められて目をキラキラさせている龍とか、まあ、生き物な、そんな感じがする。

つまり、かわいい。

つぶらな瞳。俺を萌え殺す気か?!?!?

「まあ、とりあえず。お前って何の魔石喰ったら4000年増えるの?」

「うーん、崩龍1匹か、王龍10匹?」

どうでもいいかもしれないが、龍にも格付け?されている。

5つほど。

最も強いとされている龍は、崩龍。

こいつは、その気になったら世界を崩壊させることができると言われている。

暴れたのは1000年以上前らしいけど。

で、世界には4匹いる。

そのうちの一匹が死んだら、次に強い王龍のどいつかが、自動的に崩龍になるらしい。

崩龍の次に強いのは、王龍。

こいつは、割とよくいる。

って言っても、国一つくらいはすぐ潰せる。

唯一の対抗手段として、S級冒険者。

まあ、人の場合だけ。

その次が、覇龍。

こいつは、王龍よかもつという。

これで、地方一つ潰せる。
雑魚だけど。

さらに雑魚くなったら、邪龍。
これで領一つ。

1番下のトカゲくんこと龍。

町一つ。

こんな感じ。

「まあ、当面は王龍狩まくるか。金になるし」

「そだね！」

「どうやって食べよう。なるべく、脂が乗ってて欲しい。」

「でも、私の寿命5000年に戻していいの？一応、魔王だよ？」

「問題ないよ」

「へ？なんで？」

「そりゃあ、なあ、リリースはいい奴じゃないか。今だって、確認せずに行つて、魔石を奪うだけ奪つて俺を殺せるわけじゃん。でも、それをしなかった。それに、元、魔王だろ？」

「ふふ、そうだね」

「さて、こいつを冒険者登録しに行くか。」

「よし、じゃあ冒険者ギルドに行くぞ」

「え？あ、あの、魔物として……………」

「いやいや、冒険者登録しに行くんだよ」

「よかったあ……………」

「つてか魔王の時と違う気がする。」

「魔王の時と違うね？」

「ああ、あつちは役作り。こつちが本物だよ」

「きよとんとした顔で見てきた。」

「ええ!？」

「可愛すぎないこの娘?!？」

「とりあえずギルドに行くぞ」

「私、どこに住めば？」

「何処にするか……………」

「…………あの、ね？もしよかったら、私を住まわせてくれない、かな？」
「良いに決まってるだろ」

「やった！……………ありがとう！（これでいちゃいちゃできるぞ!!）」

ああ、死んでも良い。そのくらい可愛い。

あ、そういえば。

重大なことに気がついた。

「スキル見せて」

「はい」

スキル：魔王、魔物創造、姿偽装、特級魔術。

「は？」

これ、そのまま行ったらやべーやつ。

最悪、この国潰さないといけないくらいに。

魔王と魔物創造とかアウトもいいところだろ。

「この指輪はめとけ。スキル偽装のスキル持ちだから魔王と魔物創造
隠せ」

「はい」

気を取り直してギルドへ！

いや、長かった!!

「薬指に指輪はめんな!!」

第4話

「ここがギルドな」

「ほえー。おつきい建物だねー。まあ、覚えなくていいや」
「いや、なんでだよ」

「ええー？だつてラルフいつも一緒にいてくれるでしょ？」

あーもー、ちくしょう!!リリスはかわいいなあ!!!!

「まあ、とりあえず中で冒険者登録するぞー」

「はーいつー!」

リリスは、俺を攻撃しないで殺せると思う。

「いらつしやいませー、あ、ラルフくん、おかえりー。大変だつたねー」
「おう、今日はこいつの冒険者登録にな」

「あら、かわいい子。私はリムレ。ちよつとカウンターにいきま
しよーかー」

「あ、はい!」

さて。

「おい、あの子かわいいな」

「パーティーに誘うか？」

「強く言ったらやらせてくれそうだな……………」

どうシバこうか。

とりあえず、警告だけにして、それでも絡んでくるならシバこう。
うん。

「なあ、お前ら」

「あん？」

「ウチの連れに手え出してみろ。お前ら全員殺すぞ」

ラルフの脅し――殺意を添えて。

料理でありそう。

俺はリリスとリムレのところに向かおう。

「やばい、『凶鬼のラルフ』がガチギレしてた……………」

「まじでやばい、あいつならまじで手出したら国ごと無かったことにしよう……」

「あんたら絶対に手、出さないでよ」

「は？なんで？」

「え、このギルド所属でラルフのこと知らないの!? 王龍3体を細切れにしたやつだよ?!」

「は？そんな冗談……」

「いや、まじ。多分去年からここにいるやつ全員見たし」

「あんたが行ったら血が残るかさえ怪しいわよ？」

「え……」

彼についてるあだ名は数知れず。

そんな奴に脅されたら誰も手をだそうとはしないだろう。
するのは馬鹿くらい。

行ったら、

「はい、じゃあ体液これに垂らしてー」

「はーい」

おっと、もうそこまでいったのか。

リリースは、舌を突き出し……。

【黒の障壁】ブラック・ウォール

たらー、と唾液を垂らした。

「うん、なんかなあ……」

「うん、えつちいね。あ、【黒の障壁】ありがとう」

「俺が言わない様にしたのによお!!」

「?なにがえつちかったの?」

「んーん!!な、なんでも!!」

めっちゃ動揺しとるやんけ。

「リリースがやったらえつちく見えただけ」

「そうそ……う……」

んん?

横を見るとイリアが。

なあんだ、イリアか。

「つてイリア?!?!」

「やほ。昨日ぶりだね、リリスちゃん」

「イリアちゃん!!昨日はありがとね、ラルフのお家教えてくれて!」

「いいよー」

ゴンツ。

「いた」

「なにやってんだ、イリア」

「そのままだよ」

「進めるね?リリスちゃんは、魔力値SSS、特級魔法持ち。なのでBランクからね」

「あ、この3人でパーティーを」

「はーい」

「えっ!?!」

「なんかあつた?あ、パーティー名決めたい?」

「いや、違うよ!!なんで私も?!?!」

「え?だって3人でならいいよって前言ってたじゃん」

「あ、そっか」

と、いうわけで、Aランクパーティー、『Stray Cat』が結成された。

ちなみにリムレが付けた。ノラネコって。

第5話

「さてきて、パーティーも組んだことだし、リリスの装備買ったら討伐行くかー？」

「おー！」

「おー」

元気なのがリリス。

普通なのがイリア。

リリスに装備なんていらないだろうけど、とりあえず、一応。

「ラルフ、リリスは回復魔法とか使えたりする？」

「使えるのか？」

「うん、フル・リザレクション以外は」

「うん、普通はそうだから。あと、なんなら高位の回復師でもリザレクション、使えないから」

そうなのだ。

リザレクションは、腕、もしくは下半身がなくなっても心臓が止まっていなかったら即再生っていうイカれてる蘇生魔法だ。

今、人間で使える人は、俺の知ってる限り2人しかない。

そのうちの1人は、男で、ただのクレイジーでサイコなマッドサイエンティスト。怖い。

もう1人は、女で、この街にいる。

こいつも、Aランク。

俺含めてAランクはこの街に3人。

俺、そいつ、イリア。

そいつの戦い方は……………。

グロいからやめとこ。

「ならポーションいらないか。食材買ってくるー」

「おー」

冒険者の野営時のご飯は、鍋。

テキトーな食材を入れるから、闇鍋もいいところ。

「さて、俺らはリリスの装備買いに行くか」

「うんっ!!」

あーもー可愛いなあ!!

買ってきました。

いや、可愛い!死ぬほど可愛い!!

服装は、ヘソだしのタンクトップ、ダボツとしたローブ、ホットパンツ、ニーソ、ロングブーツ。

死ねるね!!

そして。

『呪いの武器』2つって大丈夫なのか?」

「うん。あれは、人が使ったら寿命が減るっただけで、魔族の武器だから。まあ、古代の純血の系統だけね。私は一応その系統だし」

なにそれチート。

リリスは、杖と、短剣。

可愛さだけでモンスター倒せそう。

「なーなー、ねーちゃん、1人ー?」

リリスに声をかけてくるゴミナンパ野郎がいた。

「俺の連れだが何か?」

「ああ?誰だテメエ?」

「こいつの連れ」

「うるせえ!!」

わお。理不尽。

そして殴りかかってきた。

とりあえず、避けて、ギルドカードが見えたので、奪い取る。

「アグアム、24歳。ランクはB。適性、前衛A、それ以外D。ふーん」

「てめえ、なに取つとんじやオラア!!」

凄んでるつもりなんだろうけど、くっそダサイ。

「ぶふっ!!」

吹き出すくらいに。

「リリス、録音魔法使える?」

小声で聞く。

「うん、使えるよ」

「なら、今から録音して」

「うん」

かわいい！

「よし、ならギルドで決闘、するか？」

「ミンチにしたらあ!!」

「あ、言い忘れてたけど俺の名前。ラルフな」

「……………は？」

「録音できた？」

「うん、バッチリ！」

「じゃあ、ミンチとやらにしてもらおうか」

多分、すつごくいい笑みを俺は浮かべてると思う。

相手が泣きそうになってるから。

さあ、俺のリリスに手を出したらどうなるか、教えてやろう。

あはははは!!